

# 比較の視点としての「風水」

—東アジアにおける死者の埋葬をめぐる—

川 森 博 司

はじめに

1. 韓国における埋葬の事例と風水の役割
2. 韓国社会における風水（思想）の位置づけ

3. 風水、儒教祭祀、巫俗信仰の相互関係
4. 遺体・遺骨へのこだわりの問題
5. 比較の視点からみた洗骨習俗

## 論文要旨

一般に何かの異常が生じたとき、死んだ者が生きている者の世界に何らかの影響を及ぼしていると考えられることが多くあるが、その説明の仕方は文化によって異なる。本稿では、墓地をめぐる「風水」の考え方を中心にして、東アジアの各地域における生者と死者の関係の設定の仕方を考察する。まず、韓国の農村における民族誌的データにもとづいて、風水の原理の特定の地域への定着の仕方を検討する。次に、韓国における風水と儒教祭祀、巫俗信仰の三者の相互関係についての崔吉城のモデルを比較のための導入し、日本本土における遺体・遺骨へのこだわりはどのように位置づけられるかを検討する。その結果、韓国や中国、台湾の場合にみられるような葬送儀礼終了後、長期にわたって死者の遺体や遺骨と生き残った者との影響関係を設定する考え方は、日本本土においては非常に稀薄であることが示される。このことを比較の視点からみると、日本本土には墓地の風水の思想が受け入れられなかったことが、葬送儀礼終了後の遺体・遺骨へのこだわりのなさに対応している、と考えることができる。この場合、問題となるのは、沖縄・奄美地域にみられる洗骨の習俗である。これについても、墓地風水思想の受容との関わりでその位置づけを考察していく可能性がある。中国や韓国における研究を内面的に理解して、そこから分析のモデルを設定し、東アジアの地域的な広がりの中から考察を進めることによって、日本の事例の特殊性と普遍性について新たな理解が得られるのではないだろうか。